

生き活きと輝き、誇れる町の今をあなたに届ける



ワクワク忘れず感じたものを写真に込める——

椎葉國忠さん 77 上村 敦子さん 71

カメラを手にも、各地を駆ける
椎葉國忠さん。本格的に写

真を撮り始めたのは30歳を過ぎてから。モノクロ写真を現像する夜は「写真が出てくる瞬間が楽しかった」と暗室にこもり、夕飯を後にするほど没頭した。

子どもが5、6歳のころにイチョウのじゅうたんの上を走り回っている様子を撮影。その写真を熊日月例写真コンテストに出したところ、入賞。どんどん写真がおもしろくなっていった。

被写体は人物から風景まで幅広い。特に祭りの写真は多く、県内の祭りには何度も足を運んでいる。車を使い、時間は早朝から夜、場所は海から山までさまざま。「カメラがあると思う先々がおもしろくなる」と心をおどらせ、汗だくになって走り回り、構図を探る。

時には低い位置から迫力のある絵を狙い、時には高速シャッターで水しぶきを写し込むなど、自分の気持ちを一枚一枚に込める。「その場所の雰囲気伝えたい」とファインダーの端から端まで気を配り、背景にもこだわっている。

妻の敦子さんと一緒に、たくさんコンテストに応募。二人で同時に入賞するなど、栄光は大きなアルバムにも収まらないほどだ。



1 フィルム機からデジタル機へとメイン機材が変わっても「ワクワク」は当時から変わらない 2 走り回って撮り続けた汗の結晶。入賞作品はアルバムに収まり切れない 3 モデルの足より低い位置に入り込み広角レンズで撮影。モデルや空だけでなく、灯台や水平線の位置まで気を配って撮影

「何を目で見て、何を感じて、どう写真で表現するかに尽きる。熊日写真展の上位3点に入るような写真が撮りたい」。椎葉さんはいつもカメラの「ワクワク」を忘れない。さらに上を目指してシャッターチャンスを狙っている——。